

どこで笛吹く

小川未明

青空文庫

ある田舎いなかに光治こうじという十二歳さいになる男おとこの子こがありました。光治こうじは毎日まいにち村むらの小学しょうがっこう校がっこうへいつていました。彼かれは、いたつておとなしい性せい質しつで、自分じぶんのほうからほかのものに手て出だしをしてけんかをしたり、悪わる口くちをいつたりしたことがありません。けれど、どこの学が校っこうのどの級きゅうにでも、たいてい二、三人にんは、いじの悪わるい乱らん暴ぼう者ものがらんぼうものものです。

光治こうじの級きゅうにも、やはり木島きじまとか梅沢うめざわとか小山こやまとかいう乱らん暴ぼう者ものがわるものがいて、いつも彼かれらはいっしょになって、自分じぶんらの

いうことに従したがわないものをいじめたり、泣なかせたりするのであり
ました。光治こうじは日ひごろから、遊あそびの時間じかんにも、なるだけこれらの
三人にんと顔かおを合あわせないようにはしていました。

学がっこう校がっこうの運うんどうば動場どうばには大おおきなさくらさくらの木きがあつて、きれいに花はな
が咲さきました。そして花はなの盛さかりには、教きょうし師しも生せい徒とも、その木きの
下したにきて、遊あそび時間じかんには遊あそびましたが、それもわずか四よ、五日にちの
間あいだで、風かぜが吹ふいて、雨あめが降ふると、花はなは洗あらい去さられたように、こず
えから散ちつてしまい、世よはいつか夏なつになりました。そうになると、
もはやこの木きの下したにきて遊あそぶものがありません。

光治こうじは、その木きの下したにきたのであります。そこは運うんどうば動場どうばの
片かたすみであつて、かなたには青あおあお々あおあおとしていねの葉はがしげつてい

る田が見え、その間を馬を引いてゆく百姓の姿なども見えたりするのでした。

そのとき思いがけなく、例の木島・梅沢・小山の乱暴者が三人でやってきて、

「やい、こんなところでなにしているんだい、弱虫め、あつちへいつて兵隊になれよ。」

と、三人は口々にいつて、無理に光治を引きたてて連れてゆくといたしました。

「僕は腹が痛いから、駆けることができない。」
と、光治はいいました。

「うそをつけ、腹なんか痛くないんだが、兵隊になるのがいや

だから、そんなことをいうんだらう。よし、いやだなんかというなら、みんなでいじめるからそう思え。」

「僕は、いやだからいやだというんだ。僕のかつてじやないか、君らは君らで遊びたまえ。」

と、光治はいいました。

「なまいきなことをいうない、よし覚えていろ、帰りにいじめてやるから。」

と、三人は口々に光治をののしりながら、木の下を見返つてあつちへいつてしまいました。

三人はあつちへゆくと、みんなに向かつて、光治と遊んではならない、もしだれでも光治と遊ぶものがあれば、そのものも光治

といっしよにいじめるからそう思えおもといつたのでありました。ほ
 かのものはだれひとりとして心こころの中で光治こうじをにくんでいるものは
 ありませんけれど、みんな三人にんにいじめられるのをおそれて、光こ
 治うじといっしよに遊あそばなかつたのでありました。

二

その日ひ、光治こうじは学がっ校こうの帰かえりに、しくしくと泣ないて、我わが家やの
 方ほうをさして路みちを歩あるいてきました。それは三人にんにいじめられたばか
 りでなく、みんなからのけ者ものになつたというさびしさのためであ
 りました。真夏まなつの午後ごごの日ひの光ひかりは田舎道いなかみちの上うえを暑あつく照てらしてい

ました。あまり通とおつている人影ひとかげも見えなかつたのであります。このときあちらから、箱はこを背せ中なかにしよつて、つえをついた一人ひとりのじいさんが歩あるいてきました。光治こうじは、このおじいさんを泣なきはらした目めで見みて、旅たびから旅たびへとこうして歩あるく人ひとのように思おもつたのであります。じいさんも、また光治こうじの顔かおをじつと見みましたが、路みちの上うへに立たち止どまつて、

「坊ぼうはなんで泣ないているのだ。」
と、やさしくじいさんは問とうたのであります。

光治こうじははじめのうちだまは黙だまっていましたでしたが、そのおじいさんは、なんとなく普通ふつうのあめ売うりじいさんやなんかのように思おもわれず、どこかに懐なつかしみおほを覚おぼえましたから、彼かれはついに、その日ひ学がっ校こう

でみんなからのけ者ものになったことや、三人にんからいじめられたことなどを話はなしまして、また急きゆうに悲かなしくなつて話はなしをしながら泣なきだしたのであります。

「ああ、わかつた、わかつた、坊ぼうはいい子こだ。もう泣なくでない、その三人にんは悪い奴わるやつじゃ。そして、みんなはいくじなした。そんなものにかまわんでおくだ。また、いい友ともだちができる、きつとできる。おまえに笛ふえをやる、この笛ふえを吹ふいて、一人ひとりで遊あそんでいると、すこしもさびしいことはない。さあ、この笛ふえをやるから、一人ひとりでおとなしく遊あそんで、勉べん強きやうをして大おおきくなるんだ。」

といつて、じいさんは腰こしに下さげていた、小ちいさな笛ふえを光治こうじにあたえたのであります。

光治こうじは、その笛ふえをもらつて手てに取とつてみますと、竹たけに真しんちゆう鍬くわの環わがはまつている粗末そまつな笛ふえに思おもわれました。けれど、それをい
ただいて、なおもこの不思議ふしぎなじいさんを見上みあげていますと、
「さあ、私わたしはゆく……またいつか、おまえにあうことがあるだろ
う。」

といつて、光治こうじの頭あたまをじいさんはなでて、やがてその路みちを歩あるいて
いつてしまいました。光治こうじは、しばらくそこに立たつて、じいさん
を見送みおくつていますと、その姿すがたは日影ひかげの彩いろどるあちらの森もりの方ほうに消き
てしまったのでありました。

その日ひから光治こうじは野のに出でて、一人ひとりでその笛ふえを吹ふくことをけいこ
したのであります。その笛ふえはじつに不思議ふしぎな笛ふえで、いろいろな

い音色ねいろがで出でました。彼かれはじきにそのふえ笛を上じょう手ずに、また自由じゆうに吹ふき得うるようになりました。彼かれが風かせの音おとを出だそうと思おもえば、その笛ふえは、さながら風かせが木き々の葉はの上うえを渡わたるときのさわやかな涼すずしげな、葉はずれの音おとが聞きこえるように鳴なり渡わたりました。また雨あめの降ふる音おとを出だそうと思おもえば、ちようど雨あめが降ふりだしてきて軒端のきばを打うつような音おとを吹ふき鳴なりました。また小鳥ことりのねなく音をたてようと思おもえば、こずえにきて節ふしおもしろそうに鳴なく小鳥ことりの音ねを出だすことができたのであります。

光治こうじは学が校っこうから家うちに帰かえると、じいさんからもらった笛ふえ持もつて野原のへ出でたり、また麓ふもとの森もりに入はいって、あるいは草くさの上うえに腰こしを下おろしたり、あるいは木きの根ねに腰こしをかけたりし、その笛ふえを吹ふくのを

なによりの楽たのしみとしたのでありました。彼かれはこうして笛ふえを吹ふいて
 いますと、あるときは、くびのまわりの赤あかい、翼はねの色いろの美うつくしい
ことり小鳥ことりがどこから飛とんできて、すぐ光治こうじが笛ふえを吹ふいている頭あたまの上うえ
きの木きの枝えだに止とまって、はじめのうちには、こくびをかしげて熱ねっしん心しん
したに下したの方ほうを向むいて、笛ふえの音ねに聞ききとれていましたが、しまいには
ことり小鳥ことりも、その笛ふえの音ねにつられてさえずりはじめたのでありました。
 こんなふうこうじに光治こうじは、小鳥ことりまで自分じぶんの友ともだちとすることができた
 ので、もはや一人ひとりで遊あそぶことをすこしもさびしくは思おもわなかつた
 のであります。

光治こうじが笛ふえを吹ふくのを聞きくと、だれでもそれに耳みみを傾かたむけて、感かんし

心こころしないものはなかつたのです。光治こうじははじめのうちには、その

笛ふえを大事だいじにして、夜眠よるねむるときでもまくらもとに置おいて、すこしも

自分じぶんの体からだから離はなしたことはなかつたのです。彼かれはだんだん笛ふえが上じ

手ようずになつて、なんでも笛ふえで吹ふけぬものはないようになりました。

そして、自分じぶんを慰なぐさめる、もつとも楽たのしいものは、まったくこの世せ

界かいに笛ふえよりほかにないと思おもつたのであります。

夏なつ休やすみになつたある日ひのことでありました。彼かれは麓ふもとの森もりの中なか

に入はいつて、またいつもの木きの根ねに腰こしをかけて心こころゆくばかり笛ふえを吹ふ

き鳴ならそうと思おもい、家いえを出でかけました。緑みどりの森もりの中なかに入はいると、ち

ようど緑色の世界に入ったような気持ちがありました。足もとには、いろいろの小さな草の花が咲いていて、いい香気を放っていました。ところどころ木々のすきまからは、黄金色の日の光がもれて、下の草の上に光が燃えるように映っています。光治はしばらく夢を見るような気持ちで、うつとりとして一本の木の根に腰をかけて、笛も吹かずに、おだやかな夏の日の自然に見とれていました。

「どうして青葉の色はきれいなのだろう。どうしてこう、この森や、日の光や、雲の色などが美しいのだろう。」
 と、彼はしみじみと思っていたのであります。そして、彼がやがて笛を吹きますと、その音色は平常の愉快的調子に似ず、な

んとなく、しんみりとした哀しみが、その音色に漂って聞かれま
 した。小鳥もまったく声を潜めているようでありました。光治は、
 その木の根からたち上がって、森の中をもつと奥深く歩いてゆ
 きますと、ふとあちらに、ちようど自分と同じ年ごろの少年
 があちら向きになつて、絵を描いている姿が目にとまったのであ
 りました。

光治は、いままでこの森の中には、ただ自分一人しかいないも
 のと思つていましたのに、ほかにも少年がきているのを知つ
 て意外に驚きましたが、いつたいあの少年は自分の知つてい
 るものだかだれだかと思つて近づいてみますと、かつて見覚えの
 ない、色の白い、目つきのやさしそうな、なんとなく気高いとこ

ろのある少年年でありました。その少年は他人がそばに寄つてきたのを知ると、こちらを向いて光治の顔をちよつと見て笑いました。すぐにまた絵のほうに向きなおつて筆を働かして

ました。
光治は心のうちで懐かしい少年だと思ひながら、静かに少年

の背後に立つて、少年の描いている絵に目を落としますと、それは前方の木立を写生しているものでありましたが、びつくりするほど、いきいきと描けていて、その木の色といい、土の色といい、空の感じといい、それはいまにも動きそうに描けていたのでありました。少年は熱心に美しい絵の具箱の中に収めてあるいろいろの絵の具を一つ一つ使い分けて草を描いたり、ま

た鳥とりなどを描かいたり、花はななどを描かいたりしていました。

光治こうじは自分じぶんの吹ふく笛ふえの音ねにつれて、小鳥ことりがいつしよになつてさ

えずるのを自慢じまんにしていまして。いま、少年しょうねんの描かいた小鳥ことりは、

紙かみの上うへから翼はばたきをして飛とび立たつのではないかと思おもわれました。

そして、たつたすこし前まえまで、自分じぶんはこの美うつくしい自然しぜんに見みとれて

いたのであるが、このきれいな緑みどりいろのこたち木立ひひかりも日ひの光ひかりも、山やまも、

草くさも、みんなそのままに絵えの具ぐの色いろですこしも変かわらず、かえつ

てそれよりもいきいきとした姿すがたで紙かみの上うへに描かかれているのを見みま

すと、光治こうじは、もはや笛ふえを吹ふくことよりは、自分じぶんも絵えを上じょうず手に

描かいたほうがいいように考かんがえました。

「君きみかい、さつき笛ふえを吹ふいていたのは。」

と、その少年しょうねんはふり向むいて光治こうじの顔かおを見て、ちよつと笑わらつて
いいました。

「ああ、僕ぼくだ。」

と、光治こうじは簡単かんたんに答こたえた。

「君きみはよくこの森もりへ遊あそびにきて、笛ふえを吹ふくのかい。」

と、また少年しょうねんは問といました。

「ああ、よくくる。」

と、光治こうじは答こたえた。

「僕ぼくは、もう絵えを描かいたから帰かえるんだよ。」

と、その少年しょうねんはいつて、さつさと道具どうぐをかたづけしてしまつと、

「じゃ君きみ、失しっけい敬けい！」

と、少年しょうねんはさも懐なつかしそうに光治こうじの方ほうを見てみいって、いずこへともなく森もりの中なかを歩いて姿すがたを隠かくしてしまいました。光治こうじはその少年しょうねんを見送みおくりながら、どこへ帰かえるのだらうと思おもいました。また光治こうじには、あの少年しょうねんが自分じぶんに向むかって笛ふえを吹ふいたのは君きみかと問といながら、すこしもうまく吹ふいたとはいわなかつたのが、なんとなく物足ものたらなく心こころに感かんじられたのであります。

四

光治こうじは家うちへ帰かえると絵えの具箱ぐばこを取とり出だして、自分じぶんもいつしうけんめいになつて木きや空そらや、鳥とりなどを描かいてみましたけれど、どう

してもあの少年の描いたような美しい、いきいきとした色も、
 姿も出なかつたのであります。光治は、まったくこれは、絵の具
 や筆がよくないからだと思ひました。そしてあの少年の持つ
 ていたような絵の具や筆があつたら、自分にもきつと、あのよう
 にいきいきと描けるのであらうと思ひました。彼はどこへいつた
 ら、あれと同じい絵の具や、筆を売っているだらうかと、それば
 かり思つていたのであります。

ある日、光治は森の奥にある大きな池のほとりへいつて笛を吹
 こうと思つてきかかりますと、先日こないだの少年がまた池のほと
 りで絵を描いていました。少年は光治を見ると、やはり懐か
 しそうに微笑みました。光治も打ち解けて少年のそばに寄つ

て絵を見ますと、青々とした水の色や、その水の上に映っている木立の影などが、どうしてこうよく色が出ているかと驚かれるほど美しく写されていたのであります。光治はもはや笛を吹くことなど忘れてしまつて、ただ自分も、このように上手に絵を描きたいものだ。それにしても、この少年の持つているこんな絵の具と筆とがほしいものだと思ひましたから、

「君、この笛をあげるから、僕にその絵の具箱も筆もみんなくれないかね。」

と、光治は熱心に少年の顔を見ていきました。すると少年は、意外にも快く承諾をして、

「ああ僕にその笛をくれるなら、君にみなあげよう。」

といつて、絵の具箱も、筆もみんな光治にくれたのであります。

光治は喜んで家へ帰りました。そして、すぐに紙を出して、花や草を描いてみました。やはりすこしもいい色が出なくて、またたく少年の描いたのとは別物であつて、まずく汚なく自分ながら見られないものでありました。光治は、まもなく自分の心をなぐさめた唯一の笛をなくしてしまったことを後悔いたしました。

ある日の晩方、彼はさびしく思いながら田舎路を歩いていきますと、不思議なことには、このまえじいさんにあつたと同じところ、またあちから箱をしょつてとぼとぼと夕日の光を浴びながら歩いてくるじいさんに出会いました。じいさんは光治の顔

を見^みると、忘れ^{わす}ずにいたものとみえて、にこにこ笑^{わら}いながら、近^ち寄^{かよ}つてきまして、

「坊^{ぼう}はさだめし笛^{ふえ}が上^{じようず}手^てに吹^ふけるようになったろう、さあ、あの笛^{ふえ}を私^{わたし}にお返^{かえ}しなさい。そのかわり、もつとおもしろい、いろいろな音色^{ねいろ}の出^でるいい笛^{ふえ}をおまえにあげるから。」

と、優^{やさ}しくいいました。光治^{こうじ}はこれを聞^きくと、なんとももうしわけのないことをし^{おも}いました。けれど、どうすることもできませんでした。彼^{かれ}はついに、一部^ぶ始^し終^{じゆう}のことをじいさんに打^うち明^あけて、どうか許^{ゆる}してくださいともうしました。

すると、じいさんの優^{やさ}しい顔^{かお}は急^{きゆう}にむずかしそうな顔^{かお}つきに変^かわって、

「なんでも人まねをしようとする、そういう損をするもんだ。

おまえの力を、おまえは知らんけりやならん。そして、人間と

いうものは、なんでもできるもんじやない。自分が他より勝れた

働きのあつたら、ますますそれを発達させるのだ。私は、おま

えにもつといい笛をやるうと思つて持つてきたが、あの笛を私に

返さなけりやこの笛は渡されない。あの笛は、またほかにやる子

供があるのだから、早くあの笛をおまえが取りもどしてくれば、

そのときはこの笛を渡してやる。」

といつて、じいさんはいつてしまいました。

それから光治は、笛をあの子から取りもどそうと思つて

毎日森にゆき、山へ入つて少年の姿を探しました。

おりおりいいねいろ音色が遠くとおの方で聞きこえることがありましたけれど、どこで吹ふく笛ふえだろう。ついぞふたたび、その少しょうねん年の姿すがたを見みることができなかつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「少年倶楽部」

1916（大正5）年8月

※表題は底本では、「どこで笛《ふえ》吹《ふ》く」となっています。

※初出時の表題は「何処で笛吹く」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

どこで笛吹く

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>